

*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章  
テキストと和訳 (2)  
— uttarapakṣa 1 —

赤羽 律・早島 慧・西山 亮

はじめに

本稿は、Nāgārjuna (ca. 150–250) の *Mūlamadhyamaka-kārikā* (以下 MMK) に対する、Avalokitavrata (700 年頃) の復注 *Prajñāpradīpa-ṭīkā* (以下 PPrṬ) の校訂テキストと和訳であり、今日に至るまであらゆる地域・時代において議論の的となってきた勝義と世俗の二諦が説かれる箇所を範囲としている。2011 年に本稿に先立ち、第 XXIV 章のうちの前半部分 (kk. 1–6)、つまり章の導入部に相当する *anusamḍhi* と、対論者からの論難である *pūrvapakṣa* の校訂テキストと和訳を『インド学チベット学研究』(第 15 号) 上で公表する機会に恵まれた。そこでの対論者の主張は「一切が空であれば四聖諦などのあらゆる仏教教理が成り立たなくなる」というものであった。そして、著者の主張である *uttarapakṣa* 冒頭ではその批判に答えて、空性を正しく理解することが促され (k. 7)、その後、二諦が説き示される (kk. 8–10)。本稿で扱うのは、まさにこの箇所である。

PPrṬ の直接の注釈先である *Prajñāpradīpa* (以下 PPr) の著者 Bhāviveka (ca. 500–570) の二諦説に関しては、瑜伽行派の影響が指摘されており、Vasubandhu (ca. 400–480) の *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* と同様に、Bhāviveka が勝義を三種類の複合語解釈をもって分析したことが知られている。勝義説に関しては、すでに多くの研究が積み重ねられており、筆者の一人である早島も勝義の分類に関する論考を公にしている (早島 [2011])。しかし Bhāviveka の理解する二諦説の構造の詳細については、未だ学界で見解の一致をみていない。二諦説に関する問題については文末注 11 を参照されたい。

この度校定・訳出したテキストのロケーションは次の通りである。

Parts of *Prajñāpradīpa-ṭīkā* corresponding to this text and translation

- *Co ne: za 238b1 – 241a7.*

- *sDe dge*: Tohoku no. 3859, *za* 235a5 – 238a2.
- *dGa' ldan*: no. 3258, *za* 353b3 – 357b1.
- *sNar thang*: *za* 275b7 – 279a5.
- *Peking*: Otani no. 5259, *za* 281a3 – 284a5.

(each abbreviation is PPrṬ-C, PPrṬ-D, PPrṬ-G, PPrṬ-N, PPrṬ-P in this paper.)

Parts of *Prajñāpradīpa* corresponding to this text and translation

- *Co ne*: *tsha* 228b4 – 229b5.
- *sDe dge*: Tohoku no. 3853, *tsha* 227b6 – 228b7.
- *dGa' ldan*: no. 3252, *tsha* 323b6 – 325b1.
- *sNar thang*: *tsha* 260b1 – 261b6.
- *Peking*: Otani no. 5253, *tsha* 286a1 – 287a6.

(each abbreviation is PPr-C, PPr-D, PPr-G, PPr-N, PPr-P in this paper.)

本稿において、漢訳 PPr を参照したことは言うまでもないが、その漢訳テキストと *Sthiramati* (ca. 510–570) の『大乘中観積論』との連関性について述べておきたい。Nāgārjuna の MMK に対する注釈書の一つである『大乘中観積論』は、*Mahāyānasūtrālaṃkāra-bhāṣya* や *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, *Trimsikā Vijñaptimātratāsiddhi* といった瑜伽行派の論典、また *Abhidharmakośa-bhāṣya* に注釈を施した *Sthiramati* によって著された。そのテキストのサンスクリット原典は散逸しており、チベット語訳も現存しておらず、漢訳のみ伝わっている。『大乘中観積論』を主たる研究対象とした論考に月輪賢隆 [1928]<sup>i</sup>があり、PPr と少なからず一致点が見られることを指摘している。本稿で取り上げた二諦説に関して両者を対照してみても、類似した点が極めて多く、何かしらの影響関係が容易に予想される。Bhāviveka と *Sthiramati* の前後関係については、梶山雄一 [1963]<sup>ii</sup>が前者は後者に先立つということを論証しており、それに基づくと Bhāviveka の PPr を何らかの形で *Sthiramati* が参照したということが想定される。しかし、テキストの前後関係を論じる際には、チベット語訳と漢訳の訳経の状況も勘案すべきであり、サンスクリット原典を想定しつつ、チベット語訳 PPr・漢訳 PPr・漢訳『大乘中観積論』という三つの現存テキストを比較検討する必要がある。『大乘中観積論』については、詳細な研究が待たれている状態であり、筆者たちは別稿にて論じるつもりである。

最後に、次世代の研究者を中心に 2013 年 9 月 14 日から 16 日にかけて京都大学にて開催された「中観派ワークショップ 2013」に参加された皆様へ、謝意を述べたい。ワークショップにおいて本稿で取り上げた箇所を講読し、その際に参加者から貴重な意見を賜った。皆様からのアドバイスによって修正した箇所が少なからずあったことをここにお断りし、心より感謝申し上げます。

<sup>i</sup> 月輪賢隆 [1928] 「安慧菩薩の大乘中観釋論に就いて」『龍谷大学論叢』288. <sup>ii</sup> 梶山雄一 [1963] 「清弁・安慧・護法」『密教文化』64/65; Kajiyama, Yuichi [1968–1969] “Bhāvaviveka, Sthiramati and Dharmapāla” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*, 12–13, Wien.

## part 1

## Translation

## 目次

## 2 後主張 (Uttarapakṣa)

## 2.1 対論者の過失 [k. 7]

2.1.1 過失の原因 (D235a5–b1, P281a3–7)

2.1.2 空性の目的・空性・空性の対象

2.1.2.1 空性の目的 (D235b1–2, P281a7–8)

2.1.2.2 空性 (D235b2–4, P281a8–b2)

2.1.2.3 空性の対象 (D235b4–5, P281b2–3)

2.1.3 過失の結末 (D235b5–7, P281b3–6)

## 2.2 説法の方法 [k. 8]

2.2.1 説示方法としての二諦 (D235b7–236a3, P281b6–282a2)

2.2.2 世間世俗諦 (D236a3–4, P282a2–4)

2.2.3 勝義諦

2.2.3.1 「勝義」という語と特徴 (D236a4–b1, P282a4–8)

2.2.3.2 本来の意味での勝義諦の特徴 (勝義と諦の関連) (D236b1–2, P282a8–b2)

2.2.3.3 通常の勝義諦の特徴 (D236b2–3, P282b2–3)

2.2.3.3.1 勝義を対象とする無分別智 (D236b3–5, P282b3–5)

2.2.3.3.2 その「勝義」を否定する教説と智慧 (D236b5–7, P282b5–8)

## 2.3 仏陀の教説 [k. 9]

2.3.1 真実 (D236b7–237a4, P282b8–283a6)

2.3.2 仏陀・教説・甚深 (D237a4–7, P283a6–b1)

2.3.3 二つの諦の識別 (D237a7–b5, P283b1–8)

## 2.4 諦を二つ立てる必要性 [k. 10]

2.4.1 世俗諦を立てるとする方法を示す必要性 [k. 10ab] (D237b5–7, P283b8–284a2)

2.4.2 勝義諦を立てるとする方法を示す必要性 [k. 10cd] (D237b7–238a2, P284a2–5)

凡例: ( ) = 指示代名詞の内容や原語, [ ] = 文意を明瞭にするための原文にはない補い, [ ] = 原文にはない位置づけ, \* = 梵文の想定形; Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*.

## 2 後主張 (Uttarapakṣa)

### 2.1 対論者の過失 [k. 7]

#### 2.1.1 過失の原因 (D235a5–b1, P281a3–7)

さて、「空性」についてのその〔章〕独自の異論 (\*vipakṣa) を否定することによって、「(四) 聖諦は無自性に他ならない」と示すために、〔対論者が〕以上のように述べたことの、その回答としてここで、造論者 (Nāgārjuna) 自らが、「それに対して我々は并論する。汝は空性の目的・空性・空性の対象を理解していないので、したがって上述のように(我々の主張を)拒斥するのである (k. 7)」と仰ったのである。この〔偈頌〕は「『諸存在は有自性に他ならない』と語る汝は、我々中観派の認めている教説である、空性の目的・空性・空性の対象を理解していないので、したがって、『もし、このすべてが空であるならば、生じることもなく、滅することもない (k. 1ab)』」などと〔汝は〕述べて、『四聖諦などが存在しない』と、上述のように大乘を拒斥するのであり、それ(拒斥)は、多種多様であるにもかかわらず、それ(拒斥)は〔何れも〕そのように〔正しく〕はない」と示しているのである。

#### 2.1.2 空性の目的・空性・空性の対象

##### 2.1.2.1 空性の目的 (D235b1–2, P281a7–8)

その〔空性の目的・空性・空性の対象の〕うちまず、空性の目的を示すために、「ここで(説かれた) 空性の目的とは、一切の戲論の鎮まりを特徴とすることである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり、空性を証得することに基づいて、一切の戲論の鎮まりを特徴とする涅槃に到ることが、空性の目的である。

##### 2.1.2.2 空性 (D235b2–4, P281a8–b2)

空性を示すために、「空性とは、すべての(認識対象の) 把握を離れていることを特徴とするものである。(つまり) 空性を認識する智である」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり、瑜伽師たちの修習から生じる智は空性を認識するので、認識対象 (\*ālamāna) が存在しないという仕方によって、「自性」や「一切事物空性」そして「空性」というそれら三つの言語活動 (\*vyavahāra) <sup>1</sup> を空性として認識する智が、空性である。

##### 2.1.2.3 空性の対象 (D235b4–5, P281b2–3)

空性の対象を示すために、「空性の対象とは真如 (\*tathatā) を特徴とするものである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり、「勝義として諸存在は不生である」という真如を特徴とするものが、空性の対象である。<sup>2</sup>

#### 2.1.3 過失の結末 (D235b5–7, P281b3–6)

今、汝はそれら (空性の目的・空性・空性の対象) を理解していないので、以上のように「もしこのすべてが空であるならば、生じることもなく滅することもない (k. 1ab)」などと述べるのである。そして、「四聖諦などが存在しない」とそのように大乘を拒斥する〔汝〕は、不如

理作意 (\*ayoniśomanasikāra) という大きな覆いによって、知 (\*mati) の眼が覆われている者であると示すために、「汝はそれらを理解していないので、つまり、『もしこのすべてが空であるならば、生じることもなく滅することもない (k. 1ab)』などと述べて、たとえば拳を固めて虚空を打つ<sup>3</sup>ように、そのように拒斥する」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

## 2.2 説法の方法 [k. 8]

### 2.2.1 説示方法としての二諦 (D235b7–236a3, P281b6–282a2)

さて、不如理作意という大きな覆いによって、知の眼が覆われている者たちが、空性の目的・空性・空性の対象を理解せずに、虚空を拳で打つように大乘を拒斥すること、それ(拒斥すること)はそのように〔正しく〕はない。この大乘においては諸仏・世尊の法の説示が、二諦に依拠するという方法で立てられたことは、次の通りであると示すために、「この大乘においては『二諦に依拠して、諸仏の法の説示がある (k. 8ab)』。それらはまた何かというならば、『世間世俗諦と勝義諦とである (k. 8cd)』』と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

### 2.2.2 世間世俗諦 (D236a3–4, P282a2–4)

まずそのうち、世間世俗諦 (\*lokasaṃvṛtisatya) の特徴を示すために、「そのうち、『世間世俗』とは、世間的な言語活動 (\*vyavahāra) である。たとえば、『色を始めとする諸事物が生起する、住する、滅する』や、『Devadatta が行く』『Viṣṇumitra が食べる』『Somadatta が修習する』『Brahmadatta が解脱する』というようなものは、世間的な言語活動として<sup>4</sup> 無顛倒であるので、それは『世間世俗諦』である」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

### 2.2.3 勝義諦

#### 2.2.3.1 「勝義」という語と特徴 (D236a4–b1, P282a4–8)

次に、勝義諦 (\*paramārthasatya) の特徴が示されるべきである。その〔勝義諦という語の〕うち、「勝義、それが対象(義, \*artha) でもあり、勝れたもの(勝, \*parama) でもあるから、勝義 (\*paramārtha) である。あるいは」ということによって、「勝義 (\*paramārtha)」という語が同格限定複合語 (karmadhāraya)<sup>5</sup> であることが示されており、「それが対象でもあり、勝れたものでもあるから、勝義である」という同格限定複合語であることが示されているのである。

「勝れた(勝, \*parama) 無分別智 (\*nirvikalpajñāna) の対象(義, \*artha) であるから、勝義である」ということによって、「勝義 (\*paramārtha)」という語が属格限定複合語 (genitive-tatpuruṣa) であることが示されており、それが「勝れた無分別智の対象であるから勝義である」という属格限定複合語<sup>6</sup> であることが示されている。

以上のように、「勝義」という語は、同格限定複合語としても相応しく、属格限定複合語としても相応しい。その〔勝義の〕対象が何であるのかを示すために、「まさにそれ(勝義)<sup>7</sup>は『他より知られず』などの特徴を有している(真実 (\*tattva) である)」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり、「勝義(勝れた対象、勝れた無分別智の対象)」と言われているところの「対象」とは「他より知られず、寂静であり、諸々の戲論によって戲論されず、分別を離れており、多

義ではない。これが真実の特徴である (MMK chap. XVIII k. 9)」というものであると、『中論頌』において示されている。

### 2.2.3.2 本来の意味での勝義諦の特徴 (勝義と諦の関連) (D236b1-2, P282a8-b2)

「勝義」という語と特徴とがそのようなものであるならば、それが「諦」という語と特徴とにどのように関連するののかと言え、それゆえに、「『勝義』がつまり『諦』であるので、『勝義諦』である。いつ如何なる場合もそのままであるものだからである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。ここでも同格限定複合語が示されている。

まず以上によって、本来の意味での勝義諦の特徴が示された<sup>8</sup>のである。

### 2.2.3.3 通常の勝義諦の特徴 (D236b2-3, P282b2-3)

次に、通常の勝義(諦)の特徴を示すべきである。それはまた、【1】勝義という対象を有している無分別智と、【2】それを否定する教説と智慧とに結びつけられるべきである。

#### 2.2.3.3.1 勝義を対象とする無分別智 (D236b3-5, P282b3-5)

まずそのうち、【1】勝義という対象を有している無分別智を示すために、「その(勝義)という対象(\*viṣaya)を有している無分別智もまた、対象が存在しないという仕方によって勝義である。そこ(無分別智)に勝義が存在するからである」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。ここでは、「勝義(\*paramārtha)」という語が所有複合語(bahuvrīhi)であることが示されている。たとえば、まだら模様の棒が存在するものを「まだら模様の棒を持つもの」と呼ぶのと同様に、対象である勝義が存在する無分別智、それはその〔勝義〕という対象を有しているものであるから、その〔無分別智〕をも「勝義」と呼び、〔勝義(\*paramārtha)〕という語が所有複合語であることを〔師 Bhāviveka は〕示したのである。

#### 2.2.3.3.2 その「勝義」を否定する教説と智慧 (D236b5-7, P282b5-8)

そのうち、【2】それを否定する教説と智慧とを示すために、「それを否定することに適した不生などの教説と、聞・思・修より生じた智慧もまた、勝義である。勝義を理解させる手段として<sup>9</sup>無顛倒だからである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。そう〔語ることに〕よって〔以下のように〕示しているのである。「『勝義』ということばが対象と主体として解されている」<sup>10</sup>というそのことを否定することに適した手段であるので、この手段は、「手段より生じた勝義は、対象と主体では決してない」と理解させるのである。したがって、この教説と智慧もまた「勝義」に結びつけられるべきである、と。

それら(【1】と【2】)によって、通常の勝義諦の特徴が示されているのである。<sup>11</sup>

## 2.3 仏陀の教説 [k. 9]

### 2.3.1 真実 (D236b7-237a4, P282b8-283a6)

さて、不如理作意という大きな覆いによって知の眼が覆われている者たちであり、空性の目的・空性・空性の対象を理解せずに、虚空を拳で打つように大乘を拒斥する者たちであり、二諦の区別を知らない者たちは、仏・世尊の甚深なる教説における真実を知らない、ということを示すために、「まさにその二諦の区別を知らない者たちは、仏陀の甚深なる教説における真実

を知らない (k. 9)」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。

まさにそれを詳しく説明するために、「不如理作意という大きな覆いによって知の眼が覆われている者たちであり、『『可得』という世俗の特徴を、勝義〔の特徴〕と考えてはならず、〔反対に〕『不可得』という勝義の特徴もまた、世俗〔の特徴〕と考えてはならない』というように認識対象に関することを特徴として、混同のない、言語活動と勝義というその二諦の区別を知らない者たちは、仏陀の甚深なる教説における真実を知らない」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

### 2.3.2 仏陀・教説・甚深 (D237a4-7, P283a6-b1)

「かれらは、仏陀の甚深なる教説における真実を知らない (k. 9cd)」と言われているなかの、「仏陀」「教説」「甚深」という語を詳しく説明するために、

「『仏陀』という語義は前<sup>12</sup>に(述べた)通りである。『教説』とは、不死の境地に到りたいと願う人天たちに、遍知すべきもの(=苦)と断滅すべきもの(=集)と証得すべきもの(=滅)と修習すべきもの(=道)(つまり四聖諦)を誤りなく示しているものであり、(つまりは)『世尊の教説』と呼ばれているものである。『甚深』とは有と無など(の二辺)に拘泥する知を持っている者たちには(仏陀の教説は)見抜き難い、という意味で(用いられている)のである」と〔師 Bhāviveka〕は語ったのである。

### 2.3.3 二つの諦の識別 (D237a7-b5, P283b1-8)

さて、不如理作意という大きな覆いによって、知の眼が覆われている者たちであり、空性の目的・空性・空性の対象を理解せずに、虚空を拳で打つように大乘を拒斥する者たちであり、二諦の区別を識別しないならば、世尊による「諸存在は不生・〔不〕滅である」という瑜伽師の〔行為〕対象<sup>13</sup>としての教説を、言語活動として〔も諸存在は不生不滅であると〕理解してしまう者たちや、資糧道に相応するものとしての「諸存在は世俗としては生じる云々」についての教説を、「勝義としても〔諸存在は生じる云々という〕あり方は同様である」と理解してしまう者たちは、生存の森(\*bhavakāntāra)からどうしても抜け出せなくなってしまう。

〔そのような〕不幸(\*ādīnava)を示すために、「善逝のその(二諦に依拠するという)深遠極まりない流儀<sup>14</sup>をよく理解しないならば、無分別智の行と、法の無顛倒なる真実をという対象とに悟入した瑜伽師の(行為)対象に、対象が存在しないという仕方接近している『諸存在は不生・不滅である』という教説に対して、『言語活動にも<sup>15</sup>生起などを持つ(諸存在)はない』と損滅して、『もしこのすべてが空であるならば、生じることもなく滅することもない (k. 1ab)』などと分別する者たちであり、また世俗として『戒を保つこと』『禪定を修すること』と同じように、(世俗として世尊が)『諸存在は生じ、住し、滅する』と示したとき、『勝義としても(諸存在は)同じ(三)相である』というように分別する者たちは、生存の森から絶対に抜け出せない」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

## 2.4 諦を二つ立てる必要性 [k. 10]

### 2.4.1 世俗諦を立てるという方法を示す必要性 [k. 10ab] (D237b5–7, P283b8–284a2)

「もし『勝義諦を説示するだけで解脱が成就するのであるから、諦を二つ示す必要があろうか』と言うならば」というのは、大乘である中観派が諦を二つ立てるという方法を示す必要性を、対論者たちが問いたただすことばである。

その答えとして、ここで注釈者 (Bhāviveka) 自身が、「すなわち、『言語活動に依拠せずに、勝義を示すことはできない (k. 10ab)』 (というのも、) その〔偈頌で言うところの〕勝義とは、そのあらゆることばの道 (言語活動) を超えているものだからである」と語ったのであり、それ (k. 10ab) によって、世俗諦を立てるという方法を示す必要性が説かれているのである。

### 2.4.2 勝義諦を立てるという方法を示す必要性 [k. 10cd] (D237b7–238a2, P284a2–5)

次に、勝義諦を立てるという方法を示す必要性を示すために、「他者によって構想分別された (\*parikalpita) 分別をあまねく取り除くことがなければ、勝義として分別をすっかり離れた、他より知られない (真実を) 証得することにならないから、それゆえに、勝義も示されなければならない。すなわち、『勝義に依拠せずに、涅槃を得ることはない (k. 10cd)』と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。「業と煩惱と、生起の鎖まりを特徴としている」ということによって、涅槃の特徴が示されている。



## part 2

# Text<sup>i</sup>

### Contents

## 2 *Uttarapakṣa*

### 2.1 Mistake of the opponent's insistence [k. 7]

2.1.1 Cause of mistake (D235a5–b1, P281a3–7)

2.1.2 Purpose of Emptiness, Emptiness, and object of Emptiness

2.1.2.1 Purpose of Emptiness (D235b1–2, P281a7–8)

2.1.2.2 Emptiness (D235b2–4, P281a8–b2)

2.1.2.3 Object of Emptiness (D235b4–5, P281b2–3)

2.1.3 Result of mistake (D235b5–7, P281b3–6)

### 2.2 The way of teaching [k. 8]

2.2.1 Two truths, the way of teaching (D235b7–236a3, P281b6–282a2)

2.2.2 Worldly conventional truth (*Lokasaṃvṛtisatya*) (D236a3–4, P282a2–4)

2.2.3 Ultimate truth (*Paramārthasatya*)

2.2.3.1 Term and characteristics of ultimate truth (D236a4–b1, P282a4–8)

2.2.3.2 Characteristics of the essential ultimate truth (D236b1–2, P282a8–b2)

2.2.3.3 Characteristics of the normal ultimate truth (D236b2–3, P282b2–3)

2.2.3.3.1 Undifferentiated cognition (*Nirvikalpajñāna*), whose object is ultimate truth (D236b3–5, P282b3–5)

2.2.3.3.2 Preaching and wisdom to deny that “*Paramārtha*” (D236b5–7, P282b5–8)

### 2.3 Preaching of *Buddha* [k. 9]

2.3.1 Reality (D236b7–237a4, P282b8–283a6)

2.3.2 *Buddha*, preaching, and thoroughness (D237a4–7, P283a6–b1)

2.3.3 Distinction between the two truths (D237a7–b5, P283b1–8)

### 2.4 Occasion to establish two truths [k. 10]

2.4.1 Occasion to show the way to establish conventional truth [k. 10ab] (D237b5–7, P283b8–284a2)

2.4.2 Occasion to show the way to establish ultimate truth [k. 10cd] (D237b7–238a2, P284a2–5)

\*Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*; ins. = insert(s), om. = omit(s).

<sup>i</sup> Work on this paper has been generously supported by the Austrian Science Found (FWF) in the framework of the FWF project P23196-G15 “Buddhist Literature and its Context”.

## 2 Uttarapakṣa

### 2.1 Mistake of the opponent's insistence [k. 7]

#### 2.1.1 Cause of mistake (D235a5–b1, P281a3–7)

da ni **ston pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par de dgag pas 'phags pa'i bden pa rnams ño bo ñid med pa ñid** du bstan pa'i phyir de skad ces zer ba <sup>i</sup>de'i lan du 'dir bstan bcos mdzad pa ñid kiyis /

de la bśad pa khyod kiyis ni //  
ston ñid dgos dañ ston ñid dañ //  
ston ñid don ni ma rtogs pas //  
de<sup>ii</sup> phyir de ltar gnod pa byed // k. 7 <sup>iii</sup>

ces bya ba gsuñs te / 'di ni dños po rnams ño bo ñid yod<sup>iv</sup> pa ñid du smra ba **khyod kiyis ni** kho bo cag dbu ma pa 'dod pa'i gzuñ **ston pa ñid kyi dgos pa dañ / ston pa ñid dañ / ston pa ñid kyi don ma rtogs pas<sup>v</sup> de'i phyir /**

gal te 'di dag kun ston na //  
'byuñ ba med ciñ 'jig pa med // k. 1ab

ces bya ba la sogs pa smra zñiñ 'phags pa'i bden pa bži la sogs pa med do zes **de ltar** theg pa chen po la **gnod par<sup>vi</sup> byed** de / de ni mañ po yañ yin / de ni sna tshogs pa yañ yin mod kyi / de de lta ni ma yin no<sup>vii</sup> zes ston to //

#### 2.1.2 Purpose of Emptiness, Emptiness, and object of Emptiness

##### 2.1.2.1 Purpose of Emptiness (D235b1–2, P281a7–8)

de la re žig **ston pa ñid kyi dgos pa** bstan pa'i phyir / 'dir **ston pa ñid kyi dgos pa ni spros pa thams cad ñe bar ži ba'i mtshan ñid do** zes bya ba smras te / ston pa ñid rtogs pa las **spros pa thams cad ñe bar ži ba'i mtshan ñid** mya ñan las 'das pa thob pa ni **ston pa ñid kyi dgos pa** yin no //

##### 2.1.2.2 Emptiness (D235b2–4, P281a8–b2)

**ston pa ñid** bstan pa'i phyir **ston pa ñid ni 'dzin pa thams cad dañ bral ba'i<sup>viii</sup> mtshan ñid ston pa ñid la dmigs pa'i ye śes so** zes bya ba smras te / rnal 'byor pa rnams kyi bsgoms pa las byuñ ba'i śes pa ston pa ñid la dmigs pas dmigs pa med pa'i tshul gyis śes pa<sup>ix</sup> rañ gi ño bo ñid

<sup>i</sup> PPrT-G ins. ni <sup>ii</sup> PPr-P de'i <sup>iii</sup> MMK k. 7: **atra brūmah śūnyatāyām na tvam vetsy prayojanam / śūnyatām śūnyatārtham ca tata evam vihanayase //** <sup>iv</sup> PPrT-PNG med <sup>v</sup> PPrT-PNG pa <sup>vi</sup> PPrT-PNG pa <sup>vii</sup> Although the original text (PPrT and PPr) here is “de de ltar ni ma yin no”, we read it in this way based on “de ni mañ po yañ yin de ni sna tshogs kyañ yin mod kyi / de de lta ni ma yin te (D tsha 103b1–2)” in PPr chap. VII. Also, its commentary is the very much the same (PPrT-D ža 121b7–122a1). <sup>viii</sup> PPrT ins. phyir <sup>ix</sup> PPrT-DC zes bya ba: PPrT-PNG śes pa

dañ / dños po thams cad stoñ pa ñid dañ / stoñ pa ñid ces bya ba'i tha sñad gsum po de dag stoñ pa ñid du dmigs pa ni **stoñ pa' ñid** yin no //

### 2.1.2.3 Object of Emptiness (D235b4–5, P281b2–3)

**stoñ pa ñid kyi don** bstan pa'i phyir / **stoñ pa ñid kyi don ni de bzin ñid kyi mtshan ñid do** zes bya ba smras te / don dam par dños po rnams skye ba med pa zes bya ba **de bzin ñid kyi mtshan ñid ni stoñ pa ñid kyi don** yin no //

### 2.1.3 Result of mistake (D235b5–7, P281b3–6)

da ni **khyod kyi<sup>ii</sup> de dag ma rtogs<sup>iii</sup> pas<sup>iv</sup> de'i phyir 'di lta ste<sup>v</sup> /**

**gal te 'di dag kun stoñ na //**

**'byuñ ba med ciñ 'jig pa med //** k. 1

**ces bya ba la sogs pa smra zin'** phags pa'i bden pa bzi la sogs pa med do zes de ltar theg pa chen po la gnod pa byed pa ni tshul bzin ma yin pa yid la byed pa'i liñ tog<sup>vi</sup> chen pos blo gros kyi mig g-yogs<sup>vii</sup> pa yin par bstan pa'i phyir /<sup>viii</sup> **khyod kyi<sup>ix</sup> de dag ma rtogs<sup>x</sup> pas de'i phyir 'di lta ste<sup>xi</sup> /**

**gal te 'di dag kun stoñ na //**

**'byuñ ba med ciñ 'jig pa med //**

**ces bya ba la sogs pa smra zin' / dper na nam mkha' la khu tshur gzas te<sup>xii</sup> rnam pa du mas 'tshog<sup>xiii</sup> par byed pa de ltar gnod par byed do** zes bya ba smras so //

## 2.2 The way of teaching [k. 8]

### 2.2.1 Two truths, the way of teaching (D235b7–236a3, P281b6–282a2)

da ni de ltar gañ dag tshul bzin ma yin pa yid la byed pa'i liñ tog chen pos blo gros kyi mig g-yogs<sup>xiv</sup> pa dag **stoñ pa ñid kyi dgos pa dañ / stoñ pa ñid dañ / stoñ pa ñid kyi don** ma rtogs par nam mkha' la khu tshur gyis 'tshog<sup>xv</sup> pa'i tshul du<sup>xvi</sup> theg pa chen po la gnod pa<sup>xvii</sup> byed pa de ni de lta ma yin te / **theg pa chen po 'di la sañs rgyas** bcom ldan 'das rnams **kyi chos bstan<sup>xviii</sup> pa bden pa gñis la brten** pa'i tshul rnam par b'zag pa ni 'di 'dra'o zes bstan pa'i phyir / **theg pa chen po 'di la ni / (PPr //)**

**sañs rgyas rnams kyi<sup>xix</sup> chos bstan pa //**<sup>xx</sup>

**bden pa gñis la<sup>xxi</sup> yañ dag brten //** k. 8ab<sup>xxii</sup>

<sup>i</sup> G om. ni stoñ pa    <sup>ii</sup> PPr-G om. kyiis    <sup>iii</sup> PPr-DPNG rtog    <sup>iv</sup> PPrṬ om. /    <sup>v</sup> PPrṬ om. 'di lta ste  
<sup>vi</sup> PPrṬ-G rtog    <sup>vii</sup> PPrṬ-DC yogs    <sup>viii</sup> PPrṬ-DC om. /    <sup>ix</sup> PPr-G om. kyiis    <sup>x</sup> PPr-DPNG rtog  
<sup>xi</sup> PPrṬ om. 'di lta ste    <sup>xii</sup> PPrṬ om. /    <sup>xiii</sup> PPrṬ-G, PPr 'tshogs    <sup>xiv</sup> PPrṬ-DC yogs    <sup>xv</sup> PPrṬ-G 'tshogs  
<sup>xvi</sup> PPrṬ-PNG du: PPrṬ-DC gyis    <sup>xvii</sup> PPrṬ-PNG par    <sup>xviii</sup> PPrṬ-PNG stan    <sup>xix</sup> PPr-DC kyiis    <sup>xx</sup> PPr-C /  
<sup>xxi</sup> PPrṬ-G las    <sup>xxii</sup> MMK k. 8ab: **dve satye samupāsṛitya buddhānām dharmadeśanā /**

de dag kyañ gañ dañ gañ že na //<sup>i</sup>

'jig rten kun rdzob bden pa dañ //<sup>ii</sup>  
dam<sup>iii</sup> pa'i don gyi<sup>iv</sup> bden pa'o // k. 8cd<sup>v</sup>

žes<sup>vi</sup> bya ba smras so //

## 2.2.2 Worldly conventional truth (*Lokasamvrtisatya*) (D236a3–4, P282a2–4)

de la re žig 'jig rten pa'i kun rdzob kyi bden pa' i mtshan ñid bstan pa'i phyir / de la 'jig rten pa'i kun rdzob ni 'jig rten gyi tha sñad de //<sup>vii</sup> 'di lta ste / gzugs la sogs pa dños po rnam skye'o //<sup>viii</sup> gnas so // 'gag go žes<sup>ix</sup> bya ba dañ / IHas<sup>x</sup> byin 'gro'o //<sup>xi</sup> Khyab 'jug bśes gñen za'o // Zla bas byin bsgom mo // Tshañs pas byin<sup>xii</sup> grol lo<sup>xiii</sup> žes bya ba dag 'jig rten <sup>xiv</sup>gyi tha sñad kyi phyir phyin ci ma log pas<sup>xv</sup> de ni 'jig rten pa'i kun rdzob kyi bden pa yin no žes bya ba smras so //

## 2.2.3 Ultimate truth (*Paramārthasatya*)

### 2.2.3.1 Term and characteristics of ultimate truth (D236a4–b1, P282a4–8)

da ni don dam pa'i bden pa' i mtshan ñid bstan par bya ste / de la don dam pa' <sup>xvi</sup>ni de don kyañ yin la / dam pa yañ yin pas don dam pa'am žes bya bas ni don dam pa'i sgra khyad par gyi gžir bsdu ba bstan te / de don kyañ yin la dam pa yañ yin pas don dam pa'o žes khyad par gyi gžir bsdu ba bstan to //

rnam par mi rtog pa'i ye śes dam pa'i don yin pas <sup>xvii</sup>don dam pa ste žes bya bas ni don dam pa'i sgra 'i žes bya bar bsdu ba bstan te / de rnam par mi rtog pa'i ye śes dam pa'i don yin pas don dam pa'o<sup>xviii</sup> žes bya ba 'i<sup>xix</sup> žes bya bar bsdu ba bstan to //

de ltar don dam pa'i sgra khyad par gyi gžir bsdu kyañ ruñ ba 'i žes bya bar bsdu kyañ ruñ ste / de'i don gañ yin pa bstan pa'i phyir / de kho na gžan las śes pa ma yin pa la sogs pa'i mtshan ñid do žes bya ba smras te / don dam pa žes bya ba'i don ni /

gžan las śes min ži ba dañ //  
spros pa rnam kyi<sup>xx</sup> ma spros pa //<sup>xxi</sup>  
rnam rtog med don tha dad min //  
de ni de ñid mtshan ñid do //<sup>xxii</sup>

<sup>i</sup> PPr-DCPN /, PPr-G om. / or // <sup>ii</sup> PPr // <sup>iii</sup> PPr-G dom <sup>iv</sup> PPrT-NG ni <sup>v</sup> MMK k. 8cd: lokasamvrtisatyam ca satyam ca paramārthatah // <sup>vi</sup> PPrT-PNG ces <sup>vii</sup> PPr-C // <sup>viii</sup> PPrT-DC, PPr-DC: gzugs la sogs pa dños po rnam skye'o //, PPrT-PNG: gzugs la sogs pa rnam skye'o (om. //), PPr-PN: gzugs la sogs pa dños rnam kyi skye'o //, PPr-G: gzugs la sogs pa dños rnam skye'o //.  
<sup>ix</sup> PPr-PNG ces <sup>x</sup> PPr-PNG IHa <sup>xi</sup> PPrT om. // <sup>xii</sup> PPr-DC om. byin <sup>xiii</sup> PPrT om. lo <sup>xiv</sup> PPr-N ins. ni <sup>xv</sup> PPr ins. / <sup>xvi</sup> PPrT-C, PPr par <sup>xvii</sup> PPr ins. / <sup>xviii</sup> PPrT-DC ye śes dam pa'i don yin pas don dam pa'o: PPrT-PNG ye śes dam pa'i don dam pa'o <sup>xix</sup> 'žes bya ba 'i' is inserted by editors. See endnote 6.  
<sup>xx</sup> PPrT-PNG kyi <sup>xxi</sup> PPrT-G om. // <sup>xxii</sup> MMK chap. XVIII k. 9: aparapratyayam śāntam prapañcāir aprapañcītam / nirvikalpam anānārtham etat tattvaśya lakṣaṇam //

zés bya ba yin par bstan to //

### 2.2.3.2 Characteristics of the essential ultimate truth (D236b1–2, P282a8–b2)

**don dam pa**<sup>i</sup> i sgra dañ mtshan ñid ni de lta bu yin na / de **bden pa** zés bya ba<sup>i</sup> i sgra dañ mtshan ñid dañ<sup>i</sup> ji lta sbyar ze na / de<sup>i</sup> i phyir / **don dam pa ñid bden pa ñid**<sup>ii</sup> **yin pas** / <sup>iii</sup> **don dam pa**<sup>i</sup> **bden pa te**<sup>v</sup> / **de**<sup>vi</sup> **dus thams cad dañ rnam pa**<sup>vii</sup> **thams cad du de bzin du gnas pa**<sup>i</sup> **phyir ro** zés bya ba smras te / 'dir yañ khyad par gyi g'zir bsdu ba<sup>viii</sup> bstan to //

re zig de dag gis ni don dam pa pa<sup>i</sup> **don dam pa**<sup>i</sup> **bden pa**<sup>i</sup> mtshan ñid bstan to //

### 2.2.3.3 Characteristics of the normal ultimate truth (D236b2–3, P282b2–3)

da ni brdar btags<sup>x</sup> pa<sup>i</sup> **don dam pa**<sup>i</sup> mtshan ñid<sup>xi</sup> bstan par bya ste / de yañ rnam par mi rtog pa<sup>i</sup> ye ses don dam pa<sup>i</sup> yul can dañ / de 'gog pa<sup>i</sup> bstan pa dañ ses rab la ñe bar gdags so //

#### 2.2.3.3.1 Undifferentiated cognition (*Nirvikalpajñāna*), whose object is ultimate truth (D236b3–5, P282b3–5)

de la re zig rnam par mi rtog pa<sup>i</sup> ye ses don dam pa<sup>i</sup> yul can bstan pa<sup>i</sup> phyir / **rnam par mi rtog pa**<sup>i</sup> **ye ses de**<sup>i</sup> **yul can yañ yul med pa**<sup>i</sup> **tshul gyis don dam pa ste / de la don dam pa yod pa**<sup>i</sup> **phyir ro** zés bya ba smras te / de la<sup>xii</sup> don dam pa<sup>i</sup> sgra 'bru<sup>xiii</sup> mañ por bsdu ba bstan te / dper na gañ la dbyug pa khra bo<sup>xiv</sup> yod pa de la dbyug pa khra bo<sup>xv</sup> can zés bya ba de bzin du / rnam par mi rtog pa<sup>i</sup> ye ses gañ la yul don dam pa<sup>xvi</sup> yod pa de de<sup>i</sup> yul can yin pas de yañ **don dam pa**<sup>o</sup> zés 'bru mañ por bsdu ba bstan to //

#### 2.2.3.3.2 Preaching and wisdom to deny that “*Paramārtha*” (D236b5–7, P282b5–8)

de la 'gog pa<sup>i</sup> bstan pa dañ / ses rab bstan pa<sup>i</sup> phyir **de 'gog pa dañ rjes su mthun**<sup>xvii</sup> **pa skye ba med pa la sogs pa bstan pa dañ / thos pa dañ / bsams pa**<sup>xviii</sup> **dañ / bsgoms**<sup>xix</sup> **pa las byuñ ba**<sup>i</sup> **ses rab kyañ don dam pa**<sup>xx</sup> **te**<sup>xxi</sup> / **don dam pa rtogs pa**<sup>i</sup> **thabs kyi phyir phyin ci ma log pa**<sup>i</sup> **phyir ro** zés bya ba smras te / des ni **don dam pa**<sup>i</sup> sgra yul dañ yul can du 'dzin pa **de 'gog pa dañ rjes su mthun pa**<sup>i</sup> **thabs** yin pas **thabs** 'dis thabs las byuñ ba<sup>i</sup> **don dam pa** yul dañ yul can ma yin pa ñid **rtogs** par byed pa<sup>i</sup> phyir **bstan pa** dañ / **ses rab** 'di yañ **don dam pa** zés bya ba ñe bar gdags par bstan te /

de dag gis ni brdar btags<sup>xxii</sup> pa<sup>i</sup> **don dam pa**<sup>i</sup> **bden pa**<sup>i</sup> mtshan ñid bstan to //

<sup>i</sup> PPrT-DC ins. / <sup>ii</sup> PPr om. ñid <sup>iii</sup> PPr-G ins. don dam pa ñid bden pa yin pas / <sup>iv</sup> PPrT-DCPN, PPr don dam pa<sup>i</sup>: PPrT-G den pa<sup>i</sup> <sup>v</sup> PPrT-CNG, PPr ste <sup>vi</sup> PPrT-DC om. de <sup>vii</sup> PPrT-G om. pa <sup>viii</sup> PPrT-PNG bar <sup>ix</sup> PPrT-DCG om. don dam pa<sup>i</sup> <sup>x</sup> PPrT-PNG brtags <sup>xi</sup> PPrT-PNG don dam pa<sup>i</sup> mtshan ñid: PPrT-DC don dam pa pa<sup>i</sup> bden pa<sup>i</sup> mtshan ñid <sup>xii</sup> PPrT-PNG de la: PPrT-DC des <sup>xiii</sup> PPrT-DC 'bras bu: PPrT-PNG 'bru <sup>xiv</sup> PPrT-DC khra bo : PPrT-PNG khra'o <sup>xv</sup> PPrT-DC khra bo: PPrT-PNG khra'o <sup>xvi</sup> PPrT-DC par <sup>xvii</sup> PPr-PNG 'thun <sup>xviii</sup> PPr-PN bsam ba <sup>xix</sup> PPr-P bsgom <sup>xx</sup> PPr-PNG par <sup>xxi</sup> PPr-CDPG, PPrT-CNG ste <sup>xxii</sup> PPrT-PNG brtags

## 2.3 Preaching of *Buddha* [k. 9]

### 2.3.1 Reality (D236b7–237a4, P282b8–283a6)

da ni gañ dag tshul bñin ma yin pa yid la byed pa'i liñ tog chen pos blo gros kyi mig g-yogs<sup>i</sup> pa stoñ pa ñid kyi dgos pa dañ / stoñ pa ñid<sup>ii</sup> dañ / stoñ pa ñid kyi don ma rtogs<sup>iii</sup> par nam mkha' la khu tshur gyis 'tshog pa'i tshul du theg pa chen po la gnod pa<sup>iv</sup> byed pa bden pa gñis kyi rnam par dbye ba rnam par mi śes pa de dag gis sañs rgyas bcom ldan 'das kyi bstan pa zab mo'i de ñid rnam par mi śes so źes bstan pa'i phyir /

gañ dag bden pa de gñis<sup>v</sup> kyi //  
rnam dbye rnam par mi śes pa //  
de dag sañs rgyas bstan pa ni //<sup>vi</sup>  
zab mo'i<sup>vii</sup> de ñid rnam<sup>viii</sup> mi śes // k. 9 <sup>ix</sup>

źes bya ba smras so //

de ñid bye brag tu bśad pa bstan pa'i phyir /<sup>x</sup> gañ dag tshul bñin ma yin pa yid la byed pa'i liñ tog chen pos<sup>xi</sup> blo gros kyi mig g-yogs<sup>xii</sup> pa tha sñad dañ don dam pa'i bden pa de<sup>xiii</sup> gñis kyi rnam par dbye ba<sup>xiv</sup> yul gyi<sup>xv</sup> sbyor ba'i mtshan ñid kun rdzob kyi mtshan ñid dmigs pa źes bya ba gañ yin pa de don dam par rnam par brtag par mi bya ba dañ / don dam pa'i mtshan ñid dmigs su med pa źes bya ba gañ yin pa de yañ kun rdzob tu rnam par brtag par mi<sup>xvi</sup> bya ba ma<sup>xvii</sup> 'dres pa <sup>xviii</sup> rnam par mi śes pa de dag gis ni sañs rgyas kyi bstan pa zab mo'i de ñid rnam par mi śes so<sup>xix</sup> źes bya ba smras so //

### 2.3.2 *Buddha*, preaching, and thoroughness (D237a4–7, P283a6–b1)

de dag sañs rgyas bstan pa ni //  
zab mo de ñid rnam mi śes // k. 9cd

źes bya ba'i sañs rgyas dañ<sup>xx</sup> bstan pa dañ / zab mo źes bya ba'i sgra bye brag tu bśad pa bstan pa'i phyir /

sañs rgyas kyi sgra'i don ni sña ma bñin no // bstan pa źes bya ba ni lha dañ<sup>xxi</sup> mi<sup>xxii</sup> bdud rtsi'i<sup>xxiii</sup> go 'phañ thob par 'dod pa rnams yoñs su śes par bya ba dañ / spañ bar bya ba dañ / mñon sum du bya ba dañ / bsgom par bya ba dag la phyin ci ma log par ston<sup>xxiv</sup> pa ste / bcom ldan 'das kyi<sup>xxv</sup> gsuñ<sup>xxvi</sup> rab ces bya ba yin no // zab mo źes bya ba ni<sup>xxvii</sup> dños po

<sup>i</sup> PPrT-DC yogs <sup>ii</sup> PPrT-G ins. kyi <sup>iii</sup> PPrT-PNG gtogs <sup>iv</sup> PPrT-PNG par <sup>v</sup> PPrT ñid <sup>vi</sup> PPr-C / <sup>vii</sup> PPr-DC mo <sup>viii</sup> PPr-DC rnams <sup>ix</sup> MMK k. 9: ye 'naylor na vijānanti vibhāgam satyayor dvayoh / te tattvam na vijānanti gambhīre\* buddhaśāsane // (\*According to Ye edition). <sup>x</sup> PPrT-D // <sup>xi</sup> PPr ins. / <sup>xii</sup> PPrT-DC yogs <sup>xiii</sup> PPr-DC om. de <sup>xiv</sup> PPr ins. / <sup>xv</sup> PPrT-G gyis <sup>xvi</sup> PPrT-C ma <sup>xvii</sup> PPrT-C mi <sup>xviii</sup> PPr-ins. / <sup>xix</sup> PPrT-PNG, PPr-DPCPN ins. //, PPr-G ins. / <sup>xx</sup> PPrT-PNG ins. / <sup>xxi</sup> PPr-PN ins. / <sup>xxii</sup> PPrT mi'i <sup>xxiii</sup> PPrT-C rtsi <sup>xxiv</sup> PPr-D sten <sup>xxv</sup> PPr-PNG kyis <sup>xxvi</sup> PPrT-G, PPr-P gsuñs <sup>xxvii</sup> PPr ins. /

dañ /<sup>i</sup> dños po med pa la sogs pa<sup>ii</sup> mñon par zen pa'i blo gros can rnams kyis gñin rtogs par dka' ba'i don gyis so<sup>iii</sup> zes bya ba smras so //

### 2.3.3 Distinction between the two truths (D237a7–b5, P283b1–8)

da ni **gañ dag tshul bzin ma yin pa yid<sup>iv</sup> la byed pa'i liñ tog chen pos blo gros kyī mig g-yogs<sup>v</sup> pa stoñ pa ñid kyī dgos pa dañ / stoñ pa ñid dañ stoñ pa ñid kyī don** ma rtogs par nam mkha' la khu tshul gyis 'tshog<sup>vi</sup> pa'i tshul du theg pa chen po la gnod pa byed pa / bden pa gñis kyī rnam par dbye ba rnam par mi śes pa na bcom ldan 'das kyis dños po rnams skye ba dañ 'gag pa med pa rnal 'byor ba'i yul du bstan pa ni tha sñad par rtogs<sup>vii</sup> la / tshogs kyī lam dañ mthun par dños po rnams kun rdzob tu skye ba la sogs par bstan pa ni don dam par yañ rnam pa de lta bu yin par rtogs<sup>viii</sup> pa de dag srid pa'i dgon pa las nam yañ 'da' bar dka' ba'i ñes dmigs<sup>ix</sup> bstan pa'i phyir / **gañ dag bde bar gśegs pa'i tshul mchog tu zab pa de<sup>x</sup> xi legs par ma rtogs<sup>xii</sup> na<sup>xiii</sup> dños po rnams ma skyes ba dañ<sup>xiv</sup> ma 'gags<sup>xv</sup> pa<sup>xvi</sup> rnal 'byor pa rnam par mi rtog pa'i śes rab kyī spyod pa dañ / chos kyī de kho na phyin ci ma log pa'i yul la 'jug pa'i yul ñid du<sup>xvii</sup> yul med pa'i tshul gyis ñe bar 'gyur ba<sup>xviii</sup> bstan pa na<sup>xix</sup> tha sñad pa'i skye ba la sogs pa dañ ldan pa yañ med do zes skur ba btab nas /**

**gal te 'di dag kun stoñ na //**

**'byuñ ba med ciñ 'jig pa med //**<sup>xx</sup> k. 1ab

ces bya ba la sogs par<sup>xxi</sup> rnam par rtog pa dañ / kun rdzob tu tshul khirms yañ dag par blañ ba dañ / tiñ ñe 'dzin bsgom pa dañ<sup>xxii</sup> rjes su mthun par dños po rnams skye'o //<sup>xxiii</sup> gnas so //<sup>xxiv</sup> 'gag go //<sup>xxv</sup> zes bstan pa na / don dam par yañ rnam pa de lta bu yin no<sup>xxvi</sup> zes bya bar rnam par rtog pa de dag ni<sup>xxvii</sup> srid pa'i dgon pa las śin tu mi 'da'o<sup>xxviii</sup> zes bya ba smras so //

## 2.4 Occasion to establish two truths [k. 10]

### 2.4.1 Occasion to show the way to establish conventional truth [k. 10ab] (D237b5–7, P283b8–284a2)

**gal te don dam pa'i bden pa bstan pa ñid kyis thar pa 'grub pa'i phyir<sup>xxix</sup> bden pa gñis bstan pa<sup>xxx</sup> ci<sup>xxxi</sup> dgos śe na<sup>xxxii</sup> zes bya ba ni pha rol po dag theg pa chen po dbu ma pas bden pa gñis rnam par bzag<sup>xxxiii</sup> pa'i tshul bstan pa'i dgos pa 'dri ba'i tshig yin no //**

<sup>i</sup> PPr-DC om. / <sup>ii</sup> PPr par <sup>iii</sup> PPrT-PNG, PPr ins. // <sup>iv</sup> PPrT-PNG om. pa yid <sup>v</sup> PPrT-DC yogs <sup>vi</sup> PPrT-G mtshog <sup>vii</sup> PPrT-PNG rtog <sup>viii</sup> PPrT-PNG rtog <sup>ix</sup> PPrT-PG ñe dmigs, PPrT-N ñes migs <sup>x</sup> PPr-PNG ste <sup>xi</sup> PPr ins. / <sup>xii</sup> PPrT-DC om. pa <sup>xiii</sup> PPr ins. / <sup>xiv</sup> PPrT-NG, PPr om. / <sup>xv</sup> PPrT-PNG 'gag <sup>xvi</sup> PPr-PNG ins. dañ, PPr ins. / <sup>xvii</sup> PPr ins. / <sup>xviii</sup> PPr bar <sup>xix</sup> PPr ins. / <sup>xx</sup> PPrT-PNG om. // <sup>xxi</sup> PPrT-PNG pa <sup>xxii</sup> PPrT-PNG, PPr ins. / <sup>xxiii</sup> PPrT-PNG, PPr-PNG om. // <sup>xxiv</sup> PPrT-PNG om. // <sup>xxv</sup> PPrT-PNG, PPr om. // <sup>xxvi</sup> PPr-PNG ins. // <sup>xxvii</sup> PPr ins. / <sup>xxviii</sup> PPr ins. // <sup>xxix</sup> PPr-D ins. / <sup>xxx</sup> PPr-G ins. ñid kyis thar pa 'grub pa'i phyir / bden pa gñis bstan pa <sup>xxxi</sup> PPr-PNG cir <sup>xxxii</sup> PPrT śe na: PPr-DC śin <sup>xxxiii</sup> PPrT-CD gzag

de'i lan du 'dir<sup>i</sup> 'grel pa byed pa ñid kyis / 'di ltar<sup>ii</sup>

tha sñad la ni ma brten<sup>iii</sup> par //

dam pa'i don ni bstan mi nus // k. 10ab<sup>iv</sup>

don dam pa<sup>v</sup> de ni ñag gi lam de<sup>vi</sup> thams cad las<sup>vii</sup> yañ dag par 'das pa'i phyir ro źes bya ba smras te / des ni<sup>viii</sup> kun rdzob kyi bden pa rnam par bźag<sup>ix</sup> pa'i tshul bstan pa'i dgos pa bstan to //

2.4.2 Occasion to show the way to establish ultimate truth [k. 10cd] (D237b7–238a2, P284a2–5)

da ni don dam<sup>x</sup> pa'i bden pa rnam par bźag<sup>xi</sup> pa'i tshul bstan pa'i dgos pa bstan pa'i phyir / gźan gyis yoñs su brtags<sup>xii</sup> pa'i rnam par<sup>xiii</sup> rtog pa<sup>xiv</sup> ma lus par<sup>xv</sup> bsal ba med par<sup>xvi</sup> yañ don dam par<sup>xvii</sup> rtog pa dañ<sup>xviii</sup> legs par bral ba gźan las śes pa<sup>xix</sup> ma<sup>xx</sup> yin pa<sup>xxi</sup> rtogs par mi 'gyur bas<sup>xxii</sup> de'i phyir<sup>xxiii</sup> don dam pa<sup>xxiv</sup> yañ bstan te / 'di ltar<sup>xxv</sup> /

dam pa'i don la ma brten<sup>xxvi</sup> par //

mya ñan 'das pa 'thob mi 'gyur //<sup>xxvii</sup> k. 10cd<sup>xxviii</sup>

źes bya ba smras so // las dañ ñon moñs pa dañ / skye ba ñe bar źi ba'i mtshan ñid do<sup>xxix</sup> źes bya bas ni mya ñan las 'das pa'i mtshan ñid bstan to //

## Notes

<sup>1</sup> 「自性・一切事物空性・空性の三つの言語活動」という理解に関しては、不確定な要素が残る。先行訳である那須 [2005, p. 49.14] は、この箇所を、「智慧自体と、すべてのものの空性と、空性という言語慣用」と訳し、tha sñad (\*vyavahāra) を三つの要素の内の最後の「空性」のみと結びつけて理解している。しかし、チベット語訳を見る限り、tha sñad (言語活動) は三つの要素全てと結びつけられる方が良くと判断した。三つの要素のうち、二つ目の要素である「一切事物空性」は言語活動として理解した方が自然であることが、一つの理由としてあげられる。というのも「一切事物空性」を言語活動と理解しない場合、「一切事物空性を空性と認識する」となるが、これは「自性」、「空性〔という言語活動〕」という誤って実在として認識されるものを、空性として認識するという前後の文脈と比較して、不自然な表現となるからである。

加えて、以下は文脈に基づく推測ではあるが、この三つの要素は、順番に「世俗・世俗/勝義・勝義」という三つの側面を表しているように思われる。即ち、順次に「世俗において把握される自性」、「世俗

<sup>i</sup> PPrṬ-PNG om. 'dir <sup>ii</sup> PPrṬ-PNG, PPr-PN ins. / <sup>iii</sup> PPr-N bstan <sup>iv</sup> MMK k. 10ab: vyavahāram anāśritya paramārtho na deśyate / <sup>v</sup> PPr om. don dam pa <sup>vi</sup> PPrṬ-PNG, PPr om. de <sup>vii</sup> PPrṬ-G la <sup>viii</sup> PPrṬ-G om. ni <sup>ix</sup> PPrṬ-CD gźag <sup>x</sup> PPrṬ-G om. dam <sup>xi</sup> PPrṬ-CD gźag <sup>xii</sup> PPr-PN brtag <sup>xiii</sup> PPr-G pa <sup>xiv</sup> PPrṬ-G om. pa <sup>xv</sup> PPr-DCG ins. /, PPr-PN ins. // <sup>xvi</sup> PPrṬ pa'i <sup>xvii</sup> PPr ins. rnam par <sup>xviii</sup> PPr ins. / <sup>xix</sup> PPr-G par <sup>xx</sup> PPr-G om. ma <sup>xxi</sup> PPr par <sup>xxii</sup> PPr ins. / <sup>xxiii</sup> PPrṬ-PNG ins. ni <sup>xxiv</sup> PPr par <sup>xxv</sup> PPr-DC om. 'di ltar <sup>xxvi</sup> PPr-DCN brtan, PPr-PG bsten <sup>xxvii</sup> PPrṬ-PN / <sup>xxviii</sup> MMK k. 10cd: paramārtham anāgamya nirvāṇam nādhigamyate // <sup>xxix</sup> PPrṬ-P ins. /, PPrṬ-NG ins. //



において自性を有するとされる一切事物が、勝義としては空性であること、「勝義たる空性」ということを示しているのではないだろうか。そしてこの様に世俗と勝義に関する要素を並べて、それら全てが空性であると注釈することで、Avalokītavratā は、PPr において「すべてを空性と認識する」という時の「すべて」を、「世俗・世俗/勝義・勝義」として表現し、それら全てに関する言語活動を空性として理解しようとしているとは考えられないだろうか。

以上のような理由に基づき、三つの要素が並列に並び、それらが言語活動 (vyavahāra) と関係していると理解したため、この様な訳を提示した。また、那須 [2005] では、śes pa を rañ gi ño bo と結びつけているが、PPr の「～智が空性である」という文章の注釈である点を考慮に入れて、同氏の解釈は採用せず、このような訳を提示した。

<sup>2</sup> śūnyatā-prajojana / śūnyatā / śūnyatā-artha に関する Avalokītavratā の注釈の意味を十分に理解することができていない。むしろ、Avalokītavratā の理解を踏まえない方が PPr を理解しやすい。PPr のみを取り出してみると次のような訳となる：

ここで〔指摘した〕空性の目的とは、一切の戲論の鎮まりを特徴とすることである。空性とは、すべての〔認識対象の〕把握を離れていることを特徴とするものである。〔つまり〕空性を認識する智である。空性の対象とは真如を特徴とするものである。

戲論寂滅を目的とし、智そのものであり、またその智の対象であるものが空性であるという説明が簡潔に為されている。

また、śūnyatā-prajojana に関しては、次の PPr の用例から「空性〔という智を生じさせる、あるいは、その対象である空性を理解すること〕の目的」と意味を補って訳しうることを指摘しておきたい：PPr ad MMK chap. XVIII k. 5cd (D tsha 185a7–b1, P tsha 231a2–4; cf. 梶山雄一 [1978] 「知恵のともしび：第十八章自我と対象の研究」『世界の名著 2 大乘仏典』、中央公論社、p.312 下 10–20): spros pa de yañ gañ giś 'gag par 'gyur ze na / spros pa ni (P om. /) stoñ pa ñid kyis 'gag par 'gyur // (P om. //) (MMK k. 5cd) zes bya ba gsuñs te / 【対象】 rtogs pas zes bya ba'i tshig gi lhaq ma'o // chos bdag med pa ñid kyi mtshan ñid rtogs pas 'gag par 'gyur ro // 【智】 yañ na stoñ pa ñid kyis 'gag par (P om. par) 'gyur // zes bya ba la / stoñ pa ñid ni stoñ pa ñid śes pa\* ste / stoñ pa ñid śes pa skyes na 'gag par 'gyur ro (P ins. //) zes bya ba'i tha tshig go // (その戲論もまた何によって滅せられるのかというならば、「戲論は空性によって滅せられることとなる (MMK k. 5cd) と仰っておられる。【対象】〔「空性によって」〕というのは〕〔「空性の」〕理解によって」というように語を補って〔読むべきである〕。法無我という〔空性の〕特徴を理解することによって〔戲論は〕滅せられるようになるのである。【智】あるいはまた、「空性によって滅せられることとなる」における「空性」とは空性という智\*であり、空性という智を生じさせるならば、〔戲論は〕滅せられることとなる、という意味である)。\*PPr-DP ces pa; PPrṭ-D za 77b7, P za 95a4 śes pa; 梶山「知」。

この PPr 第 XVIII 章の一節は、対象としての空性を理解すること、そして空性という智を生じさせることによって戲論は滅せられることを示している。この一節を、ここでの空性の目的、空性、空性の対象と対応させて理解すれば、上述のように補って訳しうるであろう。つまり、戲論寂滅 (空性の目的) は、空性 (空性の対象) を理解することと空性という智 (空性) を生じさせることによって達成されると当該箇所を理解することができるのである。一方、Avalokītavratā の注釈に基づけば、śūnyatā-prajojana / śūnyatā / śūnyatā-artha に関して、順次、第 XXIV 章第 10 偈に説かれる「涅槃←勝義←言説」という構図に対応する可能性がある。PPrṭ において śūnyatā-prajojana は涅槃であり、空性を認識する智 (śūnyatā) は勝義の第三の語義解釈で示されている無分別智、そして、śūnyatā-artha で説かれる「勝義として諸存在は不生である」が言説であるならば、そのまま世俗の解説で例示されている「色を始めとする諸事物が生起する、住する、滅する」と対応するであろう。śūnyatā-artha を言説と理解し得る根拠の一つとしては、直前の śūnyatā で挙げられている言説の一つとして「一切事物空性」が挙げられていることが指摘できよう。なお、齋藤 [1998b] は「śūnyatā-prajojana」について、Saito [1998a] は「śūnyatā-prajojana /

śūnyatā / śūnyatā-artha」と勝義の複合語解釈との関連についてそれぞれ言及している。

<sup>3</sup> 直訳的には「たとえば虚空に向かって拳を固めて様々に打つ」となるが、日本語としての表現を考慮して翻訳した。The Practical Sanskrit-English Dictionary (Apte) と A Sanskrit-English Dictionary (Monier) とにはそれぞれ次のような解説がなされている。Apte, ākāśamuṣṭihananyāyah: The maxim of striking the sky with one's fist. The maxim illustrates a vain attempt at an impossibility; Monier, ākāśamuṣṭihanānyā (-yate): to be foolish like one who beats the air with his fist.

<sup>4</sup> “jig rten gyi tha śnād kyi phyir phyin ci ma log pas de ni 'jig rten pa'i kun rdzob kyi bden pa yin no”の理解として、「世間的な言語活動であるから、無顛倒であるから、世間世俗諦である」という解釈も可能である。世間的な言語活動と無顛倒という二つを理由として示し、その両者とそれぞれ対応する世間世俗と諦が同格、つまり、「世間世俗諦」が同格限定複合語であることを示す一文として理解の方が素直な理解かもしれない。しかしながら、後述される「勝義諦」が同格限定複合語であることを示す一文とは示し方が異なっていることに加え、内容上も本文で示した理解の方が自然かと思われる。つまり問題の一文で、「諸事物が生じる」などが「世間的な言語活動であること」は問題ないと思われるが、無条件には「無顛倒であること」とは成立しないであろう。何故なら、中観派にとって、「諸事物が生じる」などといった内容は、世俗のレベルという限定なしに無顛倒とは考えにくいからである。従って、“tha śnād kyi phyir”の原文を vyavahāratāḥ と想定し、「諸事物が生じる」などが「世俗のレベルとしては無顛倒」であるという意味で「世間的な言語活動として無顛倒であるので、それは『世間世俗諦』である」と訳した。

<sup>5</sup> 以下、勝義 (parama-artha) の語義解釈が三通り提示される。まず「同格限定複合語 (karmadhāraya)」が提示され、その後「属格限定複合語 (genitive-tatpuruṣa)」と「所有複合語 (bahuvrīhi)」が続いて示される。PPrT は、それぞれに次のようなチベット語訳を適用している。

karmadhāraya: don dam pa'i sgra khyad par gyi g'zír bsdu ba bstan te /  
genitive-tatpuruṣa: don dam pa'i sgra 'i žes bya bar bsdu ba bstan te /  
bahuvrīhi: don dam pa'i sgra 'bru mañ por bsdu ba bstan te /

bahuvrīhi 解釈を除いて、このチベット語訳には問題がある。まず karmadhāraya 解釈に関して、それに対応するチベット語 khyad par gyi g'zír bsdu ba は、那須 [1999a, n.7] によって指摘されているように、viśeṣya-samāsa というサンスクリットを想定しうる。実際に、khyad par gyi g'zír が viśeṣya であることは Dharmakīrti の Pramāṇavārttika-svavṛtti (e.g. chap. I k. 61cd の注釈部分= D ce 279b1), Haribhadra の Abhisamayālamkāra-kārikā-sāstra-vivṛti (Koei H. Amano 氏のインデックスを参照のこと) のサンスクリット原典とそのチベット語訳で確認されるが、本稿執筆にあたり調べた限りに於いて、viśeṣya-samāsa という複合語の用例を見つけることは出来なかった。チベット語訳としての khyad par gyi g'zír bsdu ba という表現自体も、用例としては PPrT の本稿の範囲内には見出すことは出来なかった。那須 [1999a] の当該の注にて指摘される類似した表現としての viśeṣaṇa-samāsa (khyad par gyi bsdu) は、Tattvasaṃgraha-pañjikā (Shastri ed. p. 153, 第 320 偈注釈部分最後他) など複数の書物に用いられていることが確認され、karmadhāraya の説明であることが伺える。A Dictionary of Sanskrit Grammar (Abhyankar and Shukla) では、viśeṣaṇa-samāsa は後分が形容詞である karmadhāraya とされており、その場合 parama-artha の解釈として相応しくないが、Tattvasaṃgraha-pañjikā (Shastri ed. p.15.18) には、spaṣṭa-lakṣaṇa に関して、「spaṣṭam ca tallakṣaṇam ca iti viśeṣaṇa-samāsaḥ」というように後分が名詞で前分が形容詞の複合語として viśeṣaṇa-samāsa が説明されているので、本稿の当該箇所が viśeṣaṇa-samāsa であったとしても差し支えないと考えられる。この点に関して、広島大学大学院の田村昌己氏より、khyad par gyi g'zír bsdu ba の還梵として\*viśeṣaṇa-pada-samāsa の可能性を指摘していただいた。この\*viśeṣaṇa-pada-samāsa は、viśeṣaṇa-samāsa と同じ意味を示しうると考えられることから、このチベット語訳の還梵として望ましいようにも思われる。ただし、viśeṣya-samāsa と同様に、このサンスクリット表現自体が見つかっていない。結局のところ、khyad par gyi g'zír bsdu ba が viśeṣaṇa-samāsa を指すことについては、両者の対応関係を示す用例が見当たらないことから、依然として問題が残る。本稿では、文脈から判断してここで用

いられる khyad par gyi gźir bsdu ba もひとまずは karmadhāraya の説明であると理解できることから、この様に訳出した。

なお補足として、khyad par gyi gźir bsdu ba に関する興味深い例を以下に指摘したい。それは、Dharmakīrti の *Vādanyāya* に対する Śāntarakṣita の注釈書 (*Vādanyāyatīkā-vipañcītārthā*) のチベット語訳に見出すことができる以下のような一文である。

bśad pa / yul bstan pa med pa'i phyir ro // phyir rgol bas lan khoñ du chud par mi nus par byas pa ni / gañ gi rnam par rig pa'i yul bstan pa ma yin pa'o zes khyad par gyi tshig bsdu ba ñid do // (D ze 134a6-7, P (no. 5725) tsho 117a3-4, P (no. 5738) ze 163b3-4)

ここで、khyad par gyi tshig bsdu ba という表現が用いられていることが分かる。「tshig」は一般的に「pada」と翻訳されるため、ここでも \*viśeṣaṇa-pada-samāsa が想定される。ところがこのチベット語訳に相応するサンスクリットを確認すると、次の様に述べられている。

ityāha – apradarśita-viṣayāt / prativādinottarapatipattir aśakyā iti kṛtvā 'pradarśito viṣayo yena iti vijñeyam / viśeṣaṇa-samāso vā / (Shastry ed.: p.115 ll.15-16; Sāṅkṛtyāyana ed.: p.120 ll.18-20)

テキスト：Swami Dwarikadas Shastry (ed.): *Vādanyāyaprakaraṇa of Ācārya Dharmakīrti with the Commentary Vipañcītārthā of Ācārya Śāntarakṣita and Sambandhaparīkṣā with the Commentary of Ācārya Prabhāchandra*, Bauddha Bharati Series 8, 1972, Vārāṇasī; Rāhula Sāṅkṛtyāyana (ed.): “Dharmakīrti’s VĀDANYĀYA with the Commentary of Śāntarakṣita”, Appendix to *The Journal of the Bihar and Orissa Research Society* Vols.XXI & XXII, 1935-1936, Patna.

一見して分かるように、khyad par gyi tshig bsdu ba は、viśeṣaṇa-samāsa に対応し、理由句として挙げられている apradarśita-viṣayāt の第二解釈が karmadhāraya であることが示されている。それ故に、khyad par gyi tshig bsdu ba は、\*viśeṣaṇa-pada-samāsa ではなく、viśeṣaṇa-samāsa の訳語と考えるべきである。ここで引用した箇所に関しては、サンスクリットとチベット語訳に若干相違があるようにみえる点には注意すべきであるが、この「viśeṣaṇa-samāsa が khyad par gyi tshig bsdu ba と翻訳される」という事実に基づくならば、khyad par gyi gźir bsdu ba の gźir に対しても、pada を想定する必要はなく、viśeṣaṇa-samāsa と考えて問題ないように思われる。しかし、それでもなお問題は残る。何故、PPrT の翻訳者は、わざわざここに原文にないと思われる gźir という言葉を挟み込んだのであろうか。Vādanyāya 注の例から見て、恐らくサンスクリットテキスト上の問題ではなく、チベット人の複合語理解が背景にあるように思われる。この点に関して、複合語の解説を示す幾つかのチベット人の手による論書に興味深い例が見出される（以下に挙げる文法に関する二つの典籍がチベット人の手によるものであることは、稲葉正就 [1955] 「チベット語古典文法の発達に及ぼしたインド文法の影響」『印度学仏教学研究』3-2, pp. 50-58 に言及されている）。まず格関係を論じている論書 *sGra'i rnam par dbye ba bstan pa* (P ño 5838, D 欠) の中で、「第六格」の説明をする際に、その関係性には二種あるとして次のように述べられている。

'brel pa ni gñis te / (1) gźi\* (P bźi) 'thun gyi drug pa ñaṅ / (2) skyes bu'i drug pa'o // (1) de la gźi 'thun gyi drug pa ni chos kyi dños po gcig ste rdzas su grub pa gñis med kyi dños po gcig gi steṅ du gźi 'thun pa yin pa la yaṅ drug pas sbyor ba yod de / de yaṅ utpala'i sñon po zes pa lta bu / utpala ñaṅ sñon po gñis ka yaṅ rdzas gñis med kyi gźi 'thun kho na yin pa la drug pas sbyor te / de lta bu'i rigs mañ du rgyas par blta'o // (2) skyes bu'i drug pa ni dños po'i rdzas tha dad pa gñis drug pas sbyor pa yin te / de yaṅ 'di ltar lhas byin gyi žaṅ po zes pa lta bu lhas byin rdzas su grub pa ñaṅ žaṅ po rdzas su grub pa gñis 'brel par ston pa la yaṅ drug pa kho nas sbyar ro // (P ño 61b2-5. \*gźi は著者による修正)

関係（属格）は二種類である。(1)「同格の第六格」と(2)「puruṣa の第六格」である。そのうち、(1)「同格の第六格」とは、法の単一な事物 (chos kyi dños po gcig) である。実体として成立している二者は存在しないが、〔二者が〕単一な事物上において基体を等しくするもの（同格）である

場合も、第六格によって結びつけられるものが存在する。それはまた「ウトパラの青」のようなものである。「ウトパラ」と「青」の両者とも二つの実体としては存在しないが、まさに基体を等しくするもの（同格）である場合、第六格によって結びつけられる。そのような種類のものは数多く広く見られるだろう。(2)「*puruṣa* の第六格」とは、事物の二つの異なった実体が第六格によって結びつけられるものであり、それも同様に〔例示するならば〕、「Devadatta の叔父」というようなものは、Devadatta〔も〕実体として成立し、「叔父」〔も〕実体として成立する。その両者の関係を示す場合にも、他ならぬ第六格によって結びつけられるのである。

ここで示される (1) *gzi 'thun gyi drug pa* が *karmadhāraya* であり、(2) *skyes bu'i drug pa* が *genitive-tatpuruṣa* であることは明らかであり、(1) において *karmadhāraya* が「基体 (*gzi*) を同じくする (*'thun*) もの」とされていることに注意したい。一方で、上述の文献の直前に収録されている *sGra'i bstan bcos* (D4351, P5837) という別の文献では *karmadhāraya* を解説する際に、次の様に説明を始める。

las 'dzin pa'i bsdu ba ni / chos rnam s kyī nō bo 'ga' la khyad par gyi gzi dañ khyad par gyi yul du yañ 'gyur ba ste utpala yañ de / sñon po yañ de yin pas utpala sñon po zes pa lta bu ste / (D co 168a2-3, P no 47a6)

〔そのうち〕「同格限定 (*karmadhāraya*) 複合語」は、諸法のある本性の上で、「区別の基体」にも「区別の対象」にもなるものである。「ウトパラ (*utpala*)」もそれであり、「青 (*nīla*)」もそれであるから、「青いウトパラ (*nīla-utpala*)」という如くである。

この一節を、先ほどの *karmadhāraya* の説明と比較する時、ある事物の上に基体を同じくする二つとして存在するものが、ここで言う「*khyad par gyi gzi*」と「*khyad par gyi yul*」であることは間違いのないであろう。またその例として両者に共通に挙げられている「青いウトパラ」の「青い (*nīla*)」と「ウトパラ (*utpala*)」とを対応させるならば、*khyad par gyi yul* と呼ばれる「区別 (形容詞) の対象」が「ウトパラ」であることはほぼ間違いのないように思われる。そうであれば、*khyad par gyi gzi* は「区別 (形容詞) の基体」、すなわち「形容詞の本体」とでも呼びうるものであり、*viśeṣaṇa* を指していると考えられる。

以上のようなチベット人の手による文献中の *karmadhāraya* の説明における *khyad par gyi gzi* の用例をみると、PPrT においても、こうした *karmadhāraya* の説明が念頭にあり、当該の *karmadhāraya* を説明する際の *viśeṣaṇa-samāsa* の *viśeṣaṇa* を *khyad par gyi gzi* と翻訳した可能性があるように思われる。勿論のことながら、この点は更に吟味される必要があると思われるが、本稿が扱う範囲を大きく越えることから、詳しくは別稿にて改めて論じたい。何れにせよ、以上のような理由から、本稿では *khyad par gyi gzi* *bsdu ba* は *viśeṣaṇa-samāsa* の訳語と想定した。

次の *genitive-tatpuruṣa* に対応する *'i zes bya bar bsdu ba* に関しては、適切なサンスクリットを想定することが困難であり、また、属格限定複合語を示す際に、*'i zes bya bar bsdu ba* を用いる用例を他に確認できていない。そもそも *'i zes bya bar bsdu ba* という術語の妥当性も問題であるが、同格限定複合語の説明の仕方「*don dam pa'i sgra khyad par gyi gzi'ir bsdu ba bstan te*」のうち、「*khyad par gyi gzi'ir bsdu ba*」が同格限定語を示しており、これと比較するとき、「*don dam pa'i sgra 'i zes bya bar bsdu ba*」のうち、「*don dam pa'i sgra*」以下「*'i zes bya bar bsdu ba*」が、属格限定複合語を意味していると考えられる。すなわち、所有を表す「*'i*」が属格を示していると思える。

この *genitive-tatpuruṣa* を示す *'i zes bya bar bsdu ba* に対応するサンスクリットを敢えて想定するならば、*ṣaṣṭhī-samāsa* である可能性を指摘できるだろう。確かに *'i zes bya ba* というような訳はこのサンスクリット語の訳出例である、*drug pa'i bsdu ba* (第六格の複合語) と一致しない。この点に関して、*karmadhāraya* と *genitive-tatpuruṣa* という二つの複合語解釈が並列に述べられる事例を見ておきたい。たとえば、Vinītadeva の *Trisatakārikāvākyāna* には、

nad med pa dañ las su ruñ ba zes bya ba'i 'og tu nor bu'i sgras lhan cig (D sgras lhan cig, P sgra dang

lhan cig) khyad par gyi bsdu ba'am / drug pa'i bsdu ba bya'o // (D śū 216b6, P hu 252a7-8)

と述べられており、karmadhāraya と genitive-tatpuruṣa の二つの複合語解釈が成立することが示されている。これは PPrT の当該箇所と同じタイプの記述であることが分かる。karmadhāraya を示す khyad par gyi bsdu ba と、PPrT 中の khyad par gyi g'zir bsdu ba とが、同一のサンスクリット viśeṣaṇa-samāsa の訳語である可能性については既に指摘した。またそうであれば、第六格の複合語 (genitive-tatpuruṣa) を示す、drug pa'i bsdu ba と 'i zes bya ba bsdu ba も、同一のサンスクリットに基づいていた可能性は否定できないだろう。それ故に、drug pa'i bsdu ba というチベット語訳に対応する ṣaṣṭhī-samāsa を 'i zes bya ba bsdu ba に対しても想定出来るように思われる。もっとも、実際のサンスクリットがどのようなものであったのか、という同定に関しては細心の注意を払うべきであり、本注記において想定したサンスクリットもあくまでも可能性の域を越えないのは言うまでもない。

<sup>6</sup> ここでの原文はそのままでは大変読み難いため、原文中に「zes bya ba 'i」を補った。その根拠は、この箇所は属格限定複合語を説明するところであり、また前注で触れたように、「'i zes bya bar bsdu ba」が、属格限定複合語 (genitive-tatpuruṣa) を意味していると考えられるからである。つまり、原文のままであれば「de rnam par mi rtog pa'i ye śes dam pa'i don yin pas don dam pa'o zes bya bar bsdu ba bstan to」であり、属格限定複合語の説明とはなっていないので、「de rnam par mi rtog pa'i ye śes dam pa'i don yin pas don dam pa'o zes bya ba 'i zes bya bar bsdu ba bstan to」というように補ったのである。また仮に「don dam pa'i sgra'i zes bya bar」とするならば、「\*paramārthaśabdasyēti」が想定されうるが、文脈上、意味をなさないので採用しなかった。

<sup>7</sup> 先行訳は「de kho na」を「tattva」として理解するが、前文からのつながりを勘案した場合、「de」を代名詞として理解する方が妥当であると判断した。

<sup>8</sup> 「bstan」には未来形あるいは過去形という二つの時制が選択肢として存在するが、この箇所の前後の用例 (cf. D236a4, D236b2) において、未来形の場合「bstan par bya」という形を用いているのが確認できる。したがって、ここでは「bya」を欠いているので、過去形と判断した。つまり don dam pa pa'i (P ins. don dam pa'i) bden pa'i mtshan ñid はすでに説かれたものとして考えられる。そうすると、勝義諦の説明を開始する際に「da ni don dam pa'i bden pa'i mtshan ñid bstan par bya ste / (D236a5)」と宣言されたものを受けていると捉え、ここで「don dam pa pa'i (P ins. don dam pa'i) bden pa'i mtshan ñid」とあるのを「don dam pa'i bden pa'i mtshan ñid」と修正する必要があるかもしれない。

<sup>9</sup> “don dam pa rtogs pa'i thabs kyi phyir phyin ci ma log pa'i phyir ro”を「勝義を理解させる手段として無顛倒だからである」と翻訳し、「thabs kyi phyir」を文末注 4 のケースと同様に、あえて理由を示すものと理解しなかった。というのも「不生の教説や聞・思・修の三慧は言語活動 (vyavahāra) に関わるものである」ので、通常は顛倒たる世俗に位置付けられるが、勝義に到らしめる手段であるからそれら無顛倒たる勝義と見なして良い」という論理で清弁が二義的な勝義を認めていると解釈したからである。つまり、「勝義を理解させる手段」という限定付けなしには、不生の教説などを無顛倒であると考えにくいので、このような翻訳を提示した。

<sup>10</sup> 次注を参照のこと。

<sup>11</sup> 以上までで、世俗諦と勝義諦とが具体的に説明された。このうち、勝義は karmadhāraya 解釈、tatpuruṣa 解釈、bahuvrīhi 解釈の三種の複合語解釈によって解釈されるが、PPr に先行する *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* でも同様に三種の複合語解釈を以て解釈することが江島 [1990] 等において指摘されている。Saito [1998a]、斎藤 [1999] は、この様な PPr の勝義解釈は少なからず *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* の影響であろうと指摘しており、この点は現在学界の通説となっていると思われる。ただし、詳細については議論が継続中であり、特に、本稿において通常の勝義諦【1】【2】と分けた、【1】無分別智と、【2】「不生などの教説」「聞・思・修より生じた智慧」とを分けるか否かは大きな問題である。斎藤氏はこの両者を分けて理解しないが、この点は池田 [2001]、Kumagai [2011] 及び、本稿執筆者の一人によ

る早鳥 [2011] によって批判的に考察される。

PPr の議論に関しては上述の諸研究に譲るが、少なくとも本稿で扱った PPrT においては、分けて理解するほうが妥当かと思われる。PPrT (本稿 2.2.3.3.2) は、通常の勝義諦を示すにあたって、「【1】勝義という対象を有している無分別智と、【2】それを否定する教説と智慧を〔も「勝義」と〕名づけるべきである」と述べる。この文脈では「それ (de)」が指す内容は直前の「勝義という対象を有している無分別智」と考えられ、さらに、PPrT (2.2.3.3.2) は「『勝義』ということばが対象と主体として解されている」というそのことを否定することに適した手段」というように、「それ (de)」を「『勝義』ということばが対象と主体として解されていること」と注釈している。つまり、PPrT は教説と智慧を、対象たる勝義 (真実) と主体たる勝義 (無分別智) という主客二元論で理解される勝義の複合語解釈を否定することに適したものと注釈しており、「【1】無分別智を【2】否定する教説と智慧」という関係性から、両者は分けて理解されるべきかと思われる。そして、「【2】教説と智慧が *bahuvrīhi* 解釈によるか否かという問題も先行研究において問題となるが、【2】教説と智慧が、複合語解釈によって対象と主体として解された勝義を否定するものであれば、【2】教説と智慧がさらに複合語解釈によって説明されることは不自然ではなかろうか。

また、PPr における「それ (de)」が示す内容については様々な見解が提示されている。前述のように、PPrT の注釈に基づけば「それ (de)」の内容は、「対象と主体として解されている勝義」ということになるが、これに対して松本 [1978: p. 135, n. 8] は、「それを否定する (de 'gog pa)」と読む場合の「それ (de)」の内容は PPr の語で示されるべきであるとし、「それが滅に随順する無生起等の説示」と訳す (松本史朗 [1978] 『Jñānagarbha の二諦説』『仏教学』5)。本稿は PPrT の翻訳を主題とするため、PPrT に基づき「それ (de)」の内容を「対象と主体として解されている勝義」とするが、この PPrT の解釈に基づき、PPr の「それ (de)」の内容を「勝義」と理解することは、文脈上それほど不自然なものであろうか。なお、「それ (de)」に関する一連の議論については、池田 [2001: pp. 6-10, n. 5] に詳しい。

さらに、通常の勝義諦については *Abhidharmakośa-bhāṣya* との類似性が指摘されており、高橋 [1973: pp. 78-79] に詳しい (高橋壮 [1973] 『龍樹の二諦説』『宗教研究』215)。また、PPr と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* との関係については、上述の Saito [1998a]、斎藤 [1999]、及び早鳥 [2011] を参照されたい。

<sup>12</sup> PPr 第 XXIV 章における反論者による前主張の部分において、仏の定義が三通り示されている：【1】諦を理解し、その諦を他の人々に理解させるお方、【2】本質を欠いているあらゆる法は、平等であるご理解なさっているお方、【3】悟りを開き、衆生を悟りに導くお方。前稿 1.2.7.1 を参照のこと。

<sup>13</sup> 前稿 1.2.1.1 を参照のこと。

<sup>14</sup> *D za 236a1-2, P za 281b7: bden pa gñis la brten pa'i tshul*. 本稿 2.2.1 を参照のこと。

<sup>15</sup> 「も」に相当する *yañ (\*api)* の位置からすると、直訳的には「言語活動に生起などを持つ〔諸存在〕もない」となる。ただし、文脈上、「も」は「言語活動」に結びつけられるべきであると考えられることから、この様な訳を提示した。

## Bhāviveka の二諦説に関する参考文献

池田道浩

2001 「*Tarkajvālā* の二諦説に関する疑問 (1)」『曹洞宗研究員研究紀要』31.

江島恵教

1980 『中観思想の展開: Bhāvaviveka 研究』春秋社.

大西薫

1993 「勝義の一考察: 『中論頌』第 24 章第 10 偈の *anāgamyā* について」『哲学』45.

北畠利親

1963 「清弁と月称の二諦論」『印度学仏教学研究』11-1.

熊谷誠慈 (Kumagai, Seiji)

2008 『中観思想史研究: インド仏教からチベット仏教, ボン教への中観思想の展開』京都大学博士論文.

2011 “Bhāviveka’s Theory of the Absolute Truth” 『印度学仏教学研究』59-3.

斎藤明 (Saito, Akira)

1998a “Bhāviveka and the *Madhya(anta)vibhāga/-bhāṣya*” 『印度学仏教学研究』46-2.

1998b 「空と言葉」『宗教研究』316.

1999 「バーヴィヴェーカの勝義解釈とその思想史的背景」『論集』9.

那須真裕美

1999a 「中期中観派の二諦説: 勝義へ志向させる方法論を中心に」『仏教学研究』55.

1999b 「Bhāvaviveka の二諦説について」『印度学仏教学研究』47-2.

2005 「Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 24 章研究ノート」『種智院大学研究紀要』6.

野沢静証

1953 「清弁の二諦説」『日本仏教学会年報』18.

早島慧

2011 「*Prajñāpradīpa* と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* における勝義解釈」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』33.

2013 「複合語解釈からみた「勝義 (paramārtha)」」『佛教学研究室年報』17.

安井広済

1955 「中観説の立場としての二諦説: 三性説に対する清弁の論破の解釈的研究」『大谷大学研究年報』8.

1961 『中観思想の研究』法蔵館.

安間剛志

2007 「*Tarkajvālā* の二諦説」『印度学仏教学研究』56-1.2008 「Bhāviveka と *Tarkajvālā*」『日本西藏学会々報』54.

## The XXIVth chapter of the *Prajñāpradīpa-tīkā* Tibetan Text and Japanese Translation (2)

– uttarapakṣa 1 –

### Summary

This is our second part of the critical Tibetan text and Japanese translation of Avalokitavratā's *Prajñāpradīpa-tīkā* chapter XXIV, which is a subcommentary on Nāgārjuna's *Mūlamadhyamaka-kārikā*. It deals with the "Two Truths Theory" of Avalokitavratā (and also Bhāviveka). We try to clarify the structure of "Two Truths", especially the multi-layered ultimate truth (*paramārtha*), which is influenced by the *Yogācāra* text *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*. It is perceived in general that the theory of "Two Truths" is one of the most important doctrine of the *Mādhyamika* school. But we should pay attention to the fact that not only that school but also *Sarvāstivādin*, *Sautrāntika* and *Yogācāra* have their own original theories of "Two Truths" and explain their central doctrines by "Two Truths".

In addition, when we read the *Prajñāpradīpa* we should refer to the Chinese translation of Sthiramati's commentary on the *Mūlamadhyamaka-kārikā* (大乘中觀積論). This text is in *Taisho daizokyo* (大正大藏經, only chapters 1–13), *Korai daizokyo* (高麗大藏經), and *Manji zokyo* (卅藏經). It is known that the *Prajñāpradīpa* and the commentary of Sthiramati are remarkably similar. In fact, regarding the part we read this time they do not differ much. It is a necessity to prepare a comparative study of the two texts in detail.

<キーワード> *Prajñāpradīpa-tīkā*, Avalokitavratā, 觀誓, Bhāviveka, 清弁, uttarapakṣa, 中論, 觀四諦品, 二諦